

---

# 魔法少女リリカルなのは。全長30?の口ボを操る少年

口ボコマンド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは。全長30?のロボを操る少年

### 【Zマーク】

Z4591Y

### 【作者名】

ロボコマンド

### 【あらすじ】

この物語は、あるひとりの少年が、2人の魔法少女に出逢う物語。全長30?のロボを操り、その少年はその2人の運命を変えようとする。

果たしてその行動の果てにあるものは…

この小説は作者の処女作です。初めて書くので読みにくいし、駄文かもしだせませんがよろしくお願いします！

## 第一話（前書き）

ありすじと余り変わりませんし、文字も違っているかもしだれませんが  
どうぞ！

## 第1話

その物語は、1人の少年の介入で徐々に変わっていく…

ある一人の少女は「願いが叶うと言われる石」をめぐり、何度もぶつかり合つ…

だが、その二人の少女の心に「あの石を使って自分の願いを叶えたい」と言う邪な心は無い…

ならば、何故その二人の少女はその石を集めのか？

1人の少女は言つ

「私は最初、助けてって言われて、その石を集めるお手伝いをしてた…でも、今は違う…私は貴女と「友達」になりたいんだ…」

1人の悲しい眼をした少女は言つ

「私は、もう一度だけでいいから、母さんに「愛されたい」んだ…母さんが集めて欲しいって言つたから…だから、その石は譲れない！」

二人の想いは交わらない…  
だが、運命は変わる…

これは、自称一般人の少年「弥生和正」が、一人の少女に出会い

その一人の少女の運命を変える物語。

## 第1話（後書き）

誤字、脱字等の指摘をしてくださると幸いです。  
次話も何とか頑張つて書きます！

## 第2話（前書き）

「うおお！」

第1話の投稿が変になつてゐるー！

やっぱり初めての投稿じや何かズレるのかな？

えつと、第2話投稿です

またおかしな箇所があるし駄文かも…

でも、見てくださると幸いです。

（第1話を書き直しました。）

「……と、言つ訳。皆わかつたかな？」

「〔〔〔はーいー〕〕〕

「はーい…」

この場所は、海鳴市と言つ市。

そして今、元気良く返事をしたのは子供達である。

そつこには、海鳴市にある学校の一つ「私立聖祥大附属小学校」である。

そして…

キンコンカンコン

と鐘がなり、その鐘の音を聞いた先生は

「うん、丁度良く鳴つたわね。それじゃあ皆一氣を付けて家に帰つてねー」

はーい、と、また生徒達は先生にそう答へ。

先生は、その生徒達の声を聞いた後、教室から出ていき、生徒達はそれを見送つた後、家に帰る用意を個人個人でしだす。

だが、この教室で唯一帰りの用意をせづ、机に、今日出された宿題のプリントを広げ、まるで答えがわかっている様な早さで、そのプリントに鉛筆を走らせる1人の少年が居た。

その少年の名は

「弥生和正」

和正はスラスラと鉛筆を動かし続け、その結果。ものの数分で宿題は片付いた。

すると、和正が宿題のプリントを書き終えた瞬間。

バシン！！

と、机を叩く音が聞こえた。和正は、自分に無関係な出来事は無視するが、その机を叩く音がしたのは、和正の近く…というよりは、今、和正の真正面に居る人物が和正の机を叩いたのだ。

和正は、明らかに自分に起こっている出来事を、何もなかつたかの様に無視し、書き終えたプリントをランドセルの中に入れて椅子から立ち上がり、そのまま帰ろうとしたが…

「ちょっと…待ちなさいよ…！」

和正の机を叩いた人物が、怒った声で和正に話しかけた。

和正はその声を聞いて、あと一歩で教室を出る足を止め、小さく溜め息を吐いた後、ゆっくり振り返った

「んん？どうした？えっと名前は確か…バー…ングスだっけ？」

「違うわよー私の名前は「アリサ・バニーナングス」！…いい加減覚えなさいよー」

「あ～あ、そんな名前だったな。で？そのバーニングスさんが俺に何の用？」

「アンタ、いつも授業中に寝てるくせに、何で今日出された宿題をいつもあんなに早く解けるのよ。」

「はあ……そんな事で俺を呼び止めたのか？案外お前も子供だな。」

「なつ！？それを言ひならアンタも子供で「あ～あ～聞こえない、聞こえない～」あつ！待ちなさいよ……」

和正は両耳を塞ぎ、そう言いながら教室を出でていき、アリサはまだ和正に何かを言いたいらしく、急いで教室を出て、廊下に出るが、その廊下の先に和正は既に居なかつた……

和正サイド

俺は教室を出た後、すぐ全速力で走り、バーニングスに見つかる前に階段を駆け降り、その勢いのまま走り続けて、学校の校門を抜け、その後もしばらく走り続け、俺はスタミナが切れる寸前で走るのを止めた。

「ハア、ハア、ハア…ふう、ちょっと疲れたが面倒くさい事だったからな……はあ、まあでも、流石に俺が「転生者」だなんて言えないわな～」

俺はそう咳きながら、右手で後頭部を軽く搔ぐ。

そこのお前。今俺の事

重度の厨二病野郎だつて思わなかつたか？

残念ながら俺は本当の「転生者」だぜ。

何? 転生者ならどうせチート能力あるんだろ? 見せて見ろよ。だつて?

まあ、見せてもいいが、今は使えない。俺が家に帰るまで待て……つ、俺は誰に話してるんだ?

……まあ、いいか。  
と、家に着いたな。

「ただいま～あ――！？！」　俺は家のドアを開けて中に入るが、その時に俺の眼にある光景が飛び込み、俺はすぐさま靴を脱ぎ捨て、そう叫びながら俺は、ある人物から、俺の所有物を奪い去った。

「ああ……お兄ちゃん！それ返してよ～」

「駄目だ！なに勝手に俺の部屋から取つて遊んでんだ！」

「む～、別に良いじゃん！お兄ちゃん、それで全然遊ばないし、お人形さんが可哀想だよ！」

「ム、痛い所を……だが！

「これは、そいつの風に遊ぶ物じゃないんだよ！だからもつ触るなよ。」

「うう～～！」

フツ、そんなに睨んでも、下からじや可愛いだけだぜ！我が妹よ！

さて…

「それじゃ俺は自室にでも行きますか。ああそれと、母さんに俺が帰ってきた事を伝えておいてくれよ」由加「」

そう俺は伝えた後、由加から取った人形？（ロボット）を右手に持ち、ランドセルを背負つたまま、自室へと向かった。

そして俺は、自室に入りつつドアのカギを閉め、背負っていたランドセルをベッドに放り投げてから、俺はドスン！と、あぐらをかけて座り、その後、右手で掘んでいた物を目の前に置き、眼を瞑り少しロボットに集中する。

そして、そのロボットへと集中を更に強めていくと、徐々に俺の全感覚が、そのロボットに移っていく感覚がしだす…

そして…

ウイイーン…

先ほどまで動く気配すらなかつたロボットが、急に明確な動きをしだし、そのロボットは和正を見上げて…

「ふう…良し！」「ダイブ」成功だ！」

ロボットから俺の声が聞こえた。

え？ 何が起こったか分からないくつて？  
良し、いいぜ！教えてやる！

まず俺は転生者だ。

難しい話しさはすっ飛ばすが、俺はこの世界に転生する時、神様にあ  
る能力をもらつた。

その一つがこの「ダイブ」だ。

俺の元居た世界のゲームの能力で「カスタムロボ」って言つロボに精神を移させて戦う事が出来る能力なんだ。

その他にもまだ能力はあるが、それは追々でもいいか。

それと、俺が「いつやつてダイブしてるのは、まだ少し慣れてないから。

実はこの訓練、5年前からやつてているのだが、まだ少し慣れてない。まあ、昔に比べたら大分マシだが、まだダイブしたまま自分の体で喋る事が出来ないんだよな……

まあ、説明はこれで終わりだ！さて……

「訓練開始だ！」

俺は言葉通りに訓練を開始した……

## 第2話（後書き）

和正は能力をまだ完全に扱えてはいません。  
訓練はしてるんですけどね～

ゲームでは、ダイブをしてもすぐには動き回れないらしいので、自分なりにかなり難しいのかな？  
と、思つて難易度を上げてみました。

誤字、脱字等の指摘は、してくださいとあります。

## 主人公とその他のキャラ設定（前書き）

え～と

まだそんなにキャラは出でていませんが、  
キャラ設定です。

主人公…身体的には一般人だな…

で！でも！ダイブすれば強いんですよ！  
本当に！！

では、キャラ設定でそんなに文章は少ないのでですが

どうぞ。

## 主人公とその他のキャラ設定

魔法少女リリカルなのは

全長30?のロボを操る少年

キャラ設定

弥生和正  
やよい・かずま

性別 男性

歳 九歳

髪の色 真っ黒

瞳の色 黒

身長 135?

顔の良さ 中の上(ちょっと格好いい。と言つ感じ)

体重 25?

性格

性格はシンプルで、自分が既に理解、わかっている事  
自分に関係の無い事にはとことん無頓着で、反対に自分に関係する事にはちゃんと対応するし、良く聞く。  
面倒くさがりと辺りからは思われがちだが、結構な働き者で、勉強以外の事には良く動く。

(教室の掃除等、家の手伝い等々…)

現時点で置かれている立場

弥生家の長男で、歳の離れた姉と、二歳違いの妹がいる。

実は転生者で、神様から数個程能力をもらっている。

私立聖祥大付属小学校に通う三年生で、実はなのは達と同じクラス。学校での成績は男子三年生の中では一位（全てのテストの点は100点。和正曰く覚えているから。だそうだ）

実の所、和正はリリカルなのはの世界を少ししか知らない。（神様から少々のあらすじは聞いてはいるが、誰が何をするのか？等の細かな情報は聞いていない）

神様から貰った能力

「ダイブ」

力スタッフロボに自分の精神を移し、操る力

（本来ならば、ダイブしていても元の体で声を発し、受け答え出来るのだが、和正はまだそれが出来ない）

「パー<sub>ツ</sub>復元」

自分のイメージした力スタッフロボのパー<sub>ツ</sub>を、復元<sub>ロボット</sub>し、扱う力（和正の一一番使い慣れた能力で、ダイブ中でも発動可能。ただし、ダイブ中とダイブをしていない状態では能力が変わり、ダイブ中にこの能力を使用すると、ガンパー<sub>ツ</sub>を和正が頭でイメージした瞬間にガンパー<sub>ツ</sub>がイメージしたパー<sub>ツ</sub>に変わり、ダイブをしていない状態なら、イメージしたパー<sub>ツ</sub>が手の平に物体として現れる）

「ハーフダイブ」

目が付いている全ての人形の見た光景を視れる能力

（本来は、力スタッフロボにダイブしたコマンダーの残留思念を読み取る能力なのだが、神様が少し能力を変えてくれた為、こうなった。）

だが、和正曰く、あまり使い道が分からぬ。との事)

身体能力は小学生のまま…

と言つより、何も変わっていない。

弥生由加  
やよい・ゆか

性別 女性

歳 六歳

髪の毛 少し茶色がかつた黒髪で、背中の辺りまで髪を伸ばしている

瞳の色 黒

顔の良さ 上の中（一言で表すなり、美少女。だ）

スリーサイズ

な～に、それ？

体重 14?

身長 120?

性格

明るく、元氣で活発な性格だが、読書も好きで、時折読んでいる本で読み方が分からぬ時は、姉か和正に聞きに行く。  
(和正はその行為が少し可憐いと思うらしいが、和正はシスコンで

は断じてない）

置かれている立場

弥生家の末っ子

和正と同じく、私立聖祥大付属小学校に通う一年生で同じクラスの男子からは、アイドル的な存在として見られている。

不思議な行動

由加は時折、和正の部屋にあるカスタムロボを勝手に持ち出し遊んでいるが

その遊び方が少し変わっていて、その持ち出したカスタムロボで遊ばず、ただ目の前に置き、まるで誰かと話す様に喋るのだ。

更には、時折頷いたり、笑い出したりと、本当に人間と会話している様な事もある…

アリサ・バニングス

いつも授業中に寝ている和正が、何故テストや宿題を早く解けるのかが気になり、何度も話しかけて（怒鳴つて？）いるが、その度に和正にはぐらかされ、逃げられている。

## 主人公とその他のキャラ設定（後書き）

主人公の設定が見にくいかも知れない…

と言つて、設定つて考えるの難しい…

なんとかもう1話は書ければいいんだけど…

おっと、俺は和正。

ととーちょっと今は話しかけないでく…うザー…ジャベリン相変わらずきたねー！

しかもショットガンか！…くそ！

ガチャガチャガチャガチャ（ガチャレバ+ボタン連打音）

よし、復帰！

ついでに後退するのが遅いぜ！

俺のボタン連打スタンガンを食ら！

ブツ…（画面？が消えた音）

はい？ てつ、おいおい！！今から俺のスタンガン連打が始まるところだつたのに何故に画面が消え…

ブン…（画面？が付いた音）

お？画面がつい…

えへへへ！？

なーなんで相手がジャベリンからジョイームスンに変わつて…うつ…くつ、くるな…！

「うおわ…！…えつ…夢？」

俺は危機一髪の瞬間に飛び起きた。

だが、どうやら俺は、死んだ？ら夢から目覚めるオチ。で、眼を覚ましたら…でだ

「母さん、起こすのはいいけど、もっと普通に起こしてよ…」

どうやら、俺の夢が途中で変になつたのは俺の寝てこるベッドの布団に何時の間にか潜り込み、頭を出して、

顔を二口一口させながら

俺の体にその豊満な胸を押し付ける母さんのせいろじい。  
すると、俺の言葉に、母さんは表情を崩さずに

「んー…やつと起きた。ちょっと唸されてたみたいだけど、大丈夫?」

「だ、大丈夫、大丈夫…」

「そー良かつた。それじゃあ早く学校の用意をして、リビングに来てね  
朝食を用意して待ってるから」  
最後まで表情を崩さずにそう母さんは言つた後  
俺の体からその豊満な胸を離し、布団から出て  
更にベッドからも出て立ち上がり、そのまま俺の部屋から出て行つた。

「はあ…まあ、言われたからには行かないとな。学校に……チャ  
チャツと用意を済ますか。」

俺はそう一人で呟いた後、学校の制服に着替えだす。  
実を言つと、母さんのあの行動は、ある日を境に始まつた事だ…  
あれは、俺が一年生の時、一度だけ学校に行つた振りをして学校に行かず、  
それを、待てども暮らせじ学校に来なかつた俺を心配してか、  
俺の担任の先生が電話で母さんに伝えた事が原因だ。

その後、それを知らずに帰つた俺を待つていたのは、一発の顔面ビ  
ンタと、

思い出すだけでも体が震えだす地獄の制裁だった。

まあ、その後に母さんが

その制裁を受けて体がボロボロの俺を抱きしめて

（お願いだから、心配させないような事はしないで…本通り……）

と、泣きながら俺に語ってきた事を、俺は昨日の様に覚えている。  
まあ、その後からは、俺も学校にはしつかり行っている。  
（あの地獄をもう一度味わいたくは無いし…）

と、そうこうしている内に俺は着替えを済まし

ランセルを右手で持った後、部屋を出ようとしたらが、ふと、一  
つだけ忘れていた事を思い出し

俺は自分の部屋の、ある箇所を見る。

俺の眼に見える物は、

自分の部屋にある横長の本棚と、その本棚の上に、ポツン…と存在  
する、一つのロボだつた…

そして、その本棚の上に存在するロボの名は

「レイ」

レイシリーズと呼ばれる中の一つで、そのシリーズの初代機…  
俺が「カスタムロボ」と言うゲームの中で、一番好きなロボだ。

（あつ、もう言えどももう一休居たな…）

俺は再び何かを思いだし、今度は自分が先ほどまで寝ていたベッド  
に手を向ける。

そして、そのベッドに近づいた後、その場で身をかがめ、俺はその  
ベッドの下に左手を滑り込みし、手探りで何かを探す……すると

「シン…

左手に何かが当たる感覚を唐突に感じ、俺は、その左手に当たった物をしつかり握った後、ベッドの下に滑り込まし自分の左手を、そのベッドからゆっくりと抜く…

そして、俺の左手に握った物は姿を現した。

俺の左手にある物は、

レイと同じく「カスタムロボ」と言うゲーム…の、続編「カスタムロボV2」に、新型のロボとして登場した。

ストライクパニッシュヤー

名を「ランス」と言つロボが俺の左手に握られていた。

なぜ、このロボがベッドの下から出てきたのか？

その理由は、俺が隠していたからだ。

えつ？ どうして隠していたのかつて？

それは、由加にこのロボを触らせない為である。

（あまり意味を成していないが…）

由加は、何故かは分からないが、度々…いや、ほぼ毎日勝手に俺の部屋に入り、隠しているのにも関わらずこのロボ、ランスを見つけては手に取り、遊んでいる。

（何で隠している場所が分かるのかは不明だが…）

俺は一度だけ、由加が俺の部屋からランスを持ち出す瞬間を見た事があり、

その時に俺は、由加の後をじつそりつけて、由加がランスを使ってどう遊んでいるのかを見たが…

不思議、としか言い様のない行動をしていた。  
まあ、その後すぐに由加から奪い返したのだが…

おつとーつに回想に入ってしまった。

「早く用を済まさないとな。」

俺は部屋でそうポツリと呟いた後、本来の用事に戻る為、動き出す。  
まずは、左手にランスを持ったままベッドから離れ、本棚まで移動した後、  
左手のランスを本棚の上に置き、今度は、いま空いた左手でレイを掴み、  
その掴んだレイを、自分の田線の高さに合わせ、レイの田と、俺の田を見合せせる。

すると…

「アイコンタクトレジスターを再確認。キューブ形態えと移行します…」

そう機械的な音声が流れた後、俺の左手にあるレイは、その姿形を変え始め、  
あつ、と詰つ間にレイの姿は、俺の左手に收まる程小さいサイコロの姿へと変形した。

もちろん、このレイが変形したサイコロの六面には、頭・足・背中・  
腹・左手・右手・の絵がその六面の一面一面に一つづつ描かれている。

（ぶつちやけ、ゲームと何ら変わりが無い）

そして俺は、そのサイロと変形したレイを「ハンドセルの中に入れ、

今度こそ、俺は自分の部屋 を出た……

和正が自分の部屋から出で、コンビングに行くまで、そつ時間はからなかつた。

「おはよ～…」

「は～、おはよ～ 朝～はんは用意してあるよ 」

と、台所から和正にせりふ言葉を発するのは、  
和正の母親

「弥生雪菜」

この人の外見を一言で表すなら

「超絶美女」

である。

そして、その言葉を聞いた和正は、自分の朝食が用意されてある長方形のテーブルに近付き、

この家族の人数分の椅子の一つに近づいて、和正は自分の身長よりも高い椅子を引き、

背が足りないので、少しよじ登る様にその椅子に座つた。

すると、椅子に座つた和正の左側から、透き通つた声で嫌みな事を言つてくる者が居た。

「ふう…「早く背が延びないかな～、って考えてる?」そんな訳無

いだろ、勇氣】

ガツン！

と、和正が、そう声を発した者に言つた直後に、和正の頭に一撃拳骨を食らわすこの人物は

和正と由加の歳の離れた姉で高校2年生、弥生家の長女。

「弥生勇氣」

この人物の外見を一言で表すなら

「可憐な女性」

である。

（性格は凶暴だが…）

「痛！何すんだこの外見詐欺…！」

「詐欺つて…？和正…もう一度それを言つてみなさい…拳骨一発じや済まさないわよ…！」

「ああ…何度も言つてやるよ……」この外見詐「ガツン！ガツン…」  
イツ…！（痛た…）

「……早く朝食を食つて学校に行け…」

急にケンカをしだした二人の頭に、唐突に拳骨が落とされた。

ケンカをしていた二人は、その拳骨でケンカを止め、拳骨が落とされた頭を手で擦りつつ

声の主を涙目で見ると、そこに居たのは

この弥生家の大黒柱

「弥生忠成」

この人物の外見を一言で表すなら「存在感があり過ぎる男性」である。

「と、父さん。何で私にも拳骨落としたの～」

〔…最初に和正に声をかけたのは勇気、お前だろ…〕

〔ハハア、確かにそうだけど〕

忠成は、勇気のその言葉に そう返した後、和正と勇気の方に、向かい合う形で椅子に座った。

二人は、忠成に叱られた後、言われた通り食事に集中した。  
そして、數十分後：

〔〔アガルハヤハサギ〕〕

和正と勇氣は、両手を合わせてやつまつと、台所に居た雪菜がテーブルの方に来て

「はい、お粗末様でした」

と、満面の笑みでそう言った。

と、ここで和正が、ある事を雪菜に聞く。

「ん? 母さん。由加は何処に行つたんだ? せひきから姿を見てない  
んだけど?」

「由加ちゃんなり、結構早い時間帯に学校に行つたよ。しつかりさ

んだからね」

「あんたとは大違ひね。」

「それを言ひなら勇氣もな……」

その和正の言葉を聞いた勇氣は、一瞬、眉がピクッと動き、手を出そうとしたが、そこにはグッと抑えた。

そして、聞きたい事を聞き終えた和正は、

「ふーん、分かった。それじゃあ朝食も食べたし、学校に行つてくれるよ。」

そう言つて和正は玄関へと走つて行き、靴を履いて玄関のドアを開けた。

すると

「カズちゃん！車には気を付けてね～！」

雪菜が、和正に聞こえる様に少し大きな声でわざわざと、

「分かってるよー、そんじゃ、行つてきまーす！」

和正も、それに応える様に 少しだけ大きな声で言い、  
その後、玄関のドアを閉めた……

だが、和正はまだ知らない。

今日と言つゝの日が、和正の運命の別れ道だとは…

### 第3話（後書き）

かなり間があいたな…

しかも、キャラ紹介みたいに…

小説を書くのは難しいけど、なんとか頑張りたい！  
(相変わらず駄文だが…)

## 第4話（前書き）

投稿が遅い割に駄文すぎる…………しかも短い…

ダメダメだな…自分は…

それでも読んでくださる方には感謝としか言えません…

それでは、じつや…。

時刻は7時40分。

和正が家を出て、すでに10分が経過。  
ところで、その和正はと言つと…

「ゾゾゾゾゾゾ」

自分のクラスの”ある机”で、突つ伏して眠つていた。

実は、和正の家と、和正の通う学校、私立聖祥大付属小学校は案外  
近くで、

歩けば10分位

走れば5分位で学校に着ける為  
和正がすでに教室に居るのは、何ら不思議ではなかつたりする。

そして、時間は過ぎていき……

なのはサイド

私の名前は「高町なのは」  
と言います。

実は、つい最近までは極々一般的な小学三年生だったのですが、  
ある日を境に「魔法少女」になっちゃいました。

フュレット…えと、ユーノ君のお願いで、  
願いが叶ひ石。名前は「ジユエルシード」と言つのですが、それを  
集めるお手伝いをしています。

あ！でもでも！しつかり学校には行つてますし、  
それに、今だつてしつかりり、学校に行くためのバスに乗つてます！

「なのははちゃん。昨日の宿題はやつてきたよね？」

「うん！もちろん」

「まつ！当たり前よね。あの宿題簡単だつたし」

「あははは…」

相変わらずアリサちゃんは口厳しいな

あつ、そつ言えば紹介するのが遅れちゃいました！

先ほど、私に最初に喋りかけてくれて、私が座つて居るバスの椅子  
の、左側の椅子に座つて居るのは、私の友達であり、親友の

「丹村すずか」ちゃんです。

それと、宿題が簡単だつたし。と、いつもの口調で言つて、  
私の右側の椅子に座つて居るのは、すずかちゃんと同じく友達で親  
友の

「アリサ・バニングス」ちゃんです。

すずかちゃんとアリサちゃんの一人と知り合つたのは、私達三人が  
まだ小学一年生の時です。

その時の事は話すと長くなるので、今は置いといて…今は仲良く談

笑中です

「やう言えば「弥生君」はもう学校に着てるのかな？」

「弥生君？あ～、アリサちゃんと毎回言い争いしてる男の子？うーん、”いつもどいつもなら”もつ着いてると思ひよ？」

すずかちゃんが、急に私達のクラスに居る男の子。

「弥生和正」君の話しあし出した所で、話しお話題はそれになつた。

「やう言えば、あいつが遅刻してきた事つて無いわね……」

「うん、確かに……あれ？よく考えれば弥生君つて、遅刻どいつもか”誰よりも早く学校に来てるよね？”

「うーん、確かにそうよね……もしかして、学校に寝泊まりしてるとか？」

（アリサちゃん…それは無いと思つた…）

心の中で私がそう思つていると、

すずかちゃんから思わぬ言葉が出た。

「弥生君が遅刻しないのは、弥生君の家と、学校との距離があまり離れてないからだよ」

「「な～んだ、そんな事だつたん…………え～～～～～！…？」

私とアリサちゃんは、すずかちゃんの、その発言に最初はつられてしまいましたが、

その後、叫ぶ様に大きな声を上げて驚いてしました。

バスの中での出来事なのですが、聞いた内容が衝撃的すぎて、思わ

ず大きな声を上げてしまいました…

(反省…)

でも、私達が驚く程の発言なのは確かなのです！

「す、すずか…どうしてそんな事知ってるの…？」

「え、と、本人に聞いた。じゃ、駄目かな？」

「えつ…ちょっと待つて、すずかちゃん！本人に聞いたって本当？」

「うん、本當だよ。私も、実はその事は気になつてて、休み時間に”左隣の席の弥生君”に、珍しく起きてたからダメ元でその時に聞いてみたんだけど、教えてもらえたよ。」

「……あいつって、授業中は寝てばっかだし、珍しく授業中起きてても不真面目だけど、ああ見えて以外と”聞かれた事にはしつかり返す”性格なのかしら…」

「……人つて見かけによらないね…」

私とアリサちゃんが、驚きすぎたせいで、最後の方は少し脱力しながらそう言つと

そのすぐ後に、私達が乗るバスは、丁度良く目的地に到着しました

……

## 第4話（後書き）

実は、なのはとフロイトは既に一度出逢っています。（原作で言つ  
て、この小説の話は、第4話と第5話の中間辺りです。）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4591y/>

魔法少女リリカルなのは。全長30?のロボを操る少年

2011年11月26日16時55分発行